

障害児体育プロジェクト

(1982年～)

辻内 俊哉 (泉南支援学校)

障害児体育プロジェクトのあゆみ

障害児体育プロジェクトは30年以上活動が続いているプロジェクトです。一時期は「認識発達プロジェクト」という名称で、保育園関係の先生たちも一緒に活動していたようですが、再び、元の名称で活動するようになりました。発足当時は、中島、安武、福田、小池、堀内の5名がメンバーでした。

私が活動に参加し始めた頃は、障害のある子どもたちにどんな教材を準備するのがいいのか、教材開発が中心だったように思います。

「0歳からの運動文化」ということばを周囲の人たちが盛んに口にしていました。当時は「系統性研究」が全国研究テーマで、発達段階を縦軸に、教材の領域を横並びにした「ちよっと並べてみた教材配列表 (という名前だったと思います)」が作られていました。

その後、支援学校では今までなかった人事強制異動が始まり、初期のメンバーたちは一般校や大学の先生になり、障体プロは一時危機に瀕しましたが、折りも折り、榊原先生や上田富男先生、淡口先生が一般校から支援学校に勤務することになり新しいうねりが生まれました。

障体プロの学習スタイルも実践研究と理論学習を交互に行い、オリジナル教材の検討や支援教育ならではのボール運動の指導法などが盛んに論じられました。榊原先生も「発達障害」の子どもたちの体の動きのぎこちなさに着目し、自立活動で身体の動きの改善プログラムを作成されています(継続検証できず申し訳ない)。

理論学習はヴィゴツキーの「発達の最近接領域」の文献で学びました。健康教育Pの上野山先生、大津先生たちも学習会に参加してくれるようになり、ヴィゴツキー学習会は今でも健康教育Pで続けられています。

私はこの最近接領域の理論で教師人生が大きく変わりました。まず、「障害の捉え方」。

「障害」といえば「〇〇ができない」などマイナスイメージのほうが先に浮かびやすいですが、ヴィゴツキーは「決して、健常児の発達を引き算したものではなく、障害児は異なる発達をする」と述べています。また、「できない」がゆえに「補償」として代替機能の力を引き出し、新しい力を発揮するというプラス面(積極的側面)もあります。そして、「発達の最近接領域の理論」。子どもの「わかる・できる」には完全に自分一人の力でできることと、支援を足がかりに「わかる・できる」が実現する二つの発達水準が存在し、この食い違う二つの発達水準に挟まれた領域を「発達の最近接領域」と規定し、この領域の中で行われる学習活動こそ、子どもたちの発達に働きかける中身を持っているという考えです。

私は近年、体育同志会の大阪支部大会や全国大会で入門提案(基調提案)を報告したり、同志会会員の紹介で講演などを頼まれる機会も増えましたが、上記の2点は必ず伝えていきたいと思っています。

近年は奈良ブロックのメンバーや笹田さん、奥さんを交え、たかつガーデンで2か月に一回、体育に限らず障害児教育に関する授業をみんな持ち寄り「子どもの見方や障害の捉え方&大切にしたいこと」を共有する学習会を細々と進めてきましたが、このコロナ禍で、今のところ休会中です。どのように活動を進めていくか悩みどころですが、「希望の光」はあります。

先日の大阪支部大会(豊中大会)では土佐さんが「ともに学びましょう」と元気に声をかけてくれ、参加してワーク形式で一講座担当してくれました。そのときの参加者は20名を超えています。笹田さんや奥さんもメキメキと力をつけつつあります。やれることを模索していきます。